



写真-1 市川・高木橋下流での原皮の川漬け作業（平成24年11月撮影）

■ わが国皮革産業発祥の地で作られる「姫路革」

上の写真-1は、高木橋下流の市川で、牛の原皮を使って「川漬け」する光景を撮ったもので、11月下旬だったので結構寒かった記憶があります。

市川の水流に牛の原皮※¹を浸して脱毛し、塩と菜種油を用いてもみあげ、天日に干して乳白色に仕上げた革は、「姫路革」と呼ばれ、しなやかでありながら強靱で、古来より武具、馬具、装飾品などに使われてきました。このような伝統的技法によりつくられる姫路革は、甲州印伝革※²（こうしゅういんでんがわ）とともに、わが国に古くから伝わる代表的な皮革で、その産地である姫路市花田町高木は、わが国皮革産業発祥の地といわれています。

明治期には万国博覧会に出品され、石灰やクロム等の化学薬品を全く使わない“なめし”の技法が外国の研究者から注目されるとともに、その美術的価値も高く評価され、「Japanese White Leather」として世界的にも名声を得てきました。



写真-2 江戸時代の作品「紅革鯉滝昇図文庫」
（林久良氏の許可を得て引用しています。）

現在、この高木地区には70社余りの皮革製造業者がいますが、明治期以降に欧米から導入された植物タンニンなめしやクロムなめしをはじめとする洋式なめし革の普及により、残念ながら伝統的技法による「なめし」はほとんど行われていません。

※¹ 原皮：剥いた状態の皮で毛はついていて、腐敗を防ぐため塩を施している。

※² 甲州印伝革：羊や鹿の皮を、脳漿を用いてなめしたものでインドから伝わった技法

■ 「鞣（なめ）し」とは

動物の剥いだ皮は、コラーゲンというタンパクが主成分で肉と似た性質を持っていて、そのまま放置すると腐りやすく、高熱で縮み硬くなり、また乾燥すると硬くなります。このような性質は革製品として都合が悪く、これらの性質を改善するのが「なめし」です。つまり、「なめし」により、皮は腐りにくくなり、少々の温度では縮まず、かつ乾燥しても硬くなりません。しかも、一旦なめすと、これらの改善した性質が容易に元に戻りません。

因みに、漢字では、なめす前は「皮」、なめした後を「革」と書きます。英語では、小判の皮は「skin」、大判の皮は「hide」、革は「leather」と表記して区別しています。

■ 「姫路革」の歴史

明治45（1912）年に著された『花田村誌』や大正元（1912）年に編纂された『姫路紀要』に、高木地区の製鞣業の起源について下記のような記述があります。

「神功皇后、三韓征伐の際、多くの俘虜を收容したが、その中に熟皮（なめかわ）術に精通する者あり。はじめ但馬の国・円山川にて試製せしも水質適さず。よって南下して播磨に入り、市川にて試みたるに大いに良好なる成績をみたり。故に、これを師としてその技術を伝習したるが今の高木村民にして、その技術によって製出するところのものを今の姫路鞣（なめし）なりとす。…（中略）…この師たる人、その後長くわが高木村に止りて親しく多数の人にその技術を伝授せり。その人の逝きし後、里人その居宅の側に祠を建て、その御魂を祀り、聖明神と尊称す。社前の棕の木はその後、秀吉のわが村に來られし際記念として植えられしものなり」

これが、「朝鮮伝來說」といわれるもので、このほかに「聖翁伝授說」や「出雲国由來說」があります。いずれにしても記録や資料がなく伝承の域をでませんが、なめしの技術が大陸から出雲や但馬などを経て姫路の地に伝わったものと考えられています。

室町時代に編まれた『殿中以下年中行事』（1454）や、足利義尚の『常德院殿御乗馬始記』（1473）に「播磨皮之白キ力革」といった記述があり、当時すでに播磨の皮革生産が盛んだったことが伺えます。

さらに、安土桃山時代になると生産技術のレベルも高くなり、『花田村誌』には「一人の老婆、敷物として熟皮※3を差し出したり。秀吉その精良他に比なきを賞し…」との記述があり、秀吉は恩賞として老婆の願いを聞き入れ井戸を掘ったとの話が残っています。

そして、天正9（1581）年12月、秀吉が信長に姫路の土産として、播磨杉原（杉原紙のこと）三百束、滑革二百枚などを献上したといわれています。（お歳暮かな。）

また、江戸時代の中頃、播磨姫路藩主・酒井忠以（ただね）（1756～1790）が、趣味や日々の出来事、天候を書き記した『玄武日記』に「姫路革」の名称が見られ、これが文献上に「姫路革」が出てくる最初ではないか、といわれています。天明元（1781）年には稲葉

通龍（つうりゅう）という大阪の刀装具・雑貨商が、刀装具や根付といった細密工芸に関する初の本格的な手引書『装剣奇賞（そうけんきしょう）』を出版していますが、その中で「姫路革 播州姫路にて製す。五色あり、いずれも一葉の葵と散桜の



写真-3 「聖明神」が祀られている高乃木神社



図-1 高木橋周辺の地図

極印あり、大きさ一尺三寸に七寸五分あり、紅革のものは此中にて高直（値が高いと）なり」とあり、姫路革が大坂の地で流通していたことが伺えます。「紅革」とは、姫路革の銀面※4 に紅漆を塗ったもので染色したものではありません。姫路革は耐水性が弱いので染色はできないのです。

江戸中期以降の全国的な商品経済の発展に支えられて、皮革業もまた全国的な商品流通の中に組み込まれ、姫路革やその革細工物は、姫路、大坂、江戸、尾張等の商人の手を通じて全国に販売されていました。

現在私たちが使用している大部分の皮革製品は、明治以降に欧米から導入された生産技術によるもので、明治2（1869）年外国事務局御用係にあった陸奥宗光※5 が海外に兵事視察に行った際、革は軍隊になくてはならないものであることを知り、明治4（1871）年植物タンニンなめしの技術を導入するため、ドイツから製革・製靴の技術者を招聘し土族の子弟を集めて教育したそうです。

姫路革は、植物タンニンなめし革やクロムなめし革などがなかった時代には各方面に広く使用されましたが、重労働の上に出来上がるまでに3ヶ月以上を要することから、洋式なめし革の普及とともに需要は激減しました。

※3 熟皮：脱毛した生皮を皮の地脂等でなめした皮のことで少し硬い。

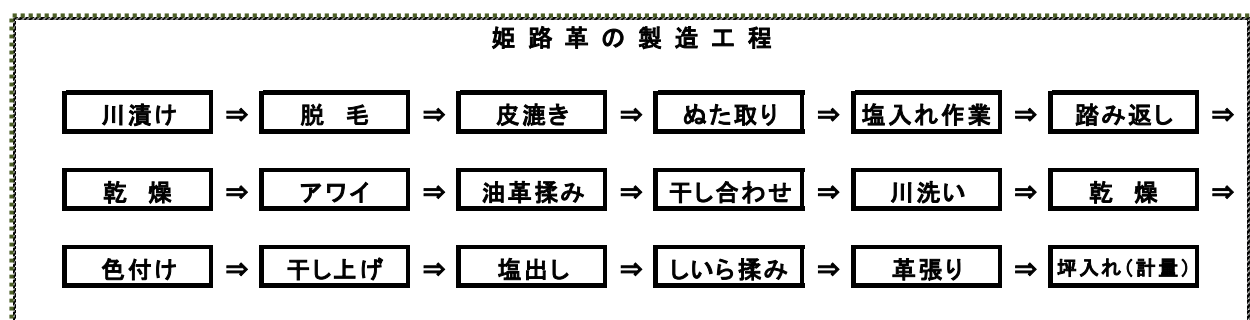
※4 銀面：革の表面部分を指す。近代的な皮の鞣し技術を習得するため、外国から技術者を招聘した際、革の表面のことを指して使った英語の Grain の発音が、当時の日本人には「ギン」と聞こえたところから「銀面」と呼ばれるようになったそうです。

※5 陸奥宗光：文久3（1863）年、勝海舟の神戸海軍操練所に入り、慶応3（1867）年には坂本龍馬の海援隊に加わるなど、終始坂本竜馬と行動をともにした。勝と坂本の知遇を得た陸奥はその才幹を発揮し、坂本をして「(刀を) 二本差さなくても食っていけるのは、俺と陸奥だけだ」と言わしめるほどだったという。明治維新後、わずか1ヶ月足らずだったが第4代兵庫県知事（明治2年）を務め、明治25（1892）年には第2次伊藤内閣の外務大臣に就任、英米独仏伊など15ヶ国と結んでいたすべての不平等条約の改正（治外法権の撤廃）を成し遂げた。明治30（1897）年8月死去。享年53。

■ 「姫路革」の伝統的技法において最も注意を要する「川漬け」

姫路革の製法については、『花田村誌』等の資料によると概ね以下の通りです。ただ、伝承技術であることから、職人によって「鞣し」や「晒し」、「揉み」の程度が微妙に異なり、資料により製造法が異なる部分が多々見られますが、端的に言うと「牛皮を用い、川漬け、脱毛、塩入れ、菜種油による油入れなどの工程を経て、天日乾燥と足揉みを繰り返して仕上げる」ということです。

この工程の中で特に市川の流れと密接な関係にあるのが「川漬け」です。



原皮を「川漬け」することで、微生物の力によって毛根が緩み、脱毛しやすくなるといわれています。「川漬け」がうまくできるのは、播磨地方では市川の高木付近だけで、緩やかな流れと、浅からず深からずの水量のある場所に限られているとか。他の場所で行くと川漬けの途中で銀面が腐敗するなど良い結果が得られないそうです。

川漬けは、原皮4～6枚を1組として荒縄で結わえ、水深30～80cmの場所に頭部を下流に向けて漬けます。そうすることで皮は水流によって広がり、水流が皮全体に均等に当たるようになるとか（写真-1 参照）。



写真-4 川漬け前の牛の原皮

漬け込む期間は水深・流速・水温が大きく影響します。

- 水深は、深すぎると漬け込み作業が困難であるばかりか水温が上がらず漬け込む期間が長くなる。
- 流速は、速すぎると部分的な脱毛が起こり、逆に遅すぎると皮の腐敗が進行する。
- 水温によって川漬け期間は変わり、一般的に冬季は 15 日から 20 日間、春・秋季は 5～10 日間、夏季では 3 日～5 日間で、盛夏は水温が高いため川漬けを行わない。

水揚げ時期を誤って川漬け期間が 1 日でも長くなると、皮の腐敗が起き、その後の工程で銀面を損傷し、仕上げ革が特有の淡白色とならず、革の品質が低下するそうです。水揚げのタイミングは、原皮の肢部の毛を指で軽くこすると容易に脱毛できるときを目安としています。

このように川漬け作業は全工程中最も注意を要する所で、気象状況により大きく左右され、重労働の上、常に脱毛状態のチェックが必要で経験が重要視される作業です。

■ 高木地区を流れる市川でしか得られない「姫路革」の白さ

現在主流となっているクロムなめしでは、脱毛に石灰を使用し、その強アルカリ性を中和するために硫化物を使用、さらにクロムを使ってなめしますが、姫路革の製法では化学薬品を一切使用しません。この点について明治期に外国の専門家から注目が集まりいろいろと研究されました。

明治の中頃、ドイツ政府が派遣した視察員ラインハルト氏の報告によると、「上流にある生野鉱山跡から流れ出る水が関係しているとして、高木地区の上下流でなめし試験をしたが好結果が得られず立証することができませんでした。そこで、高木地区の市川河床には漂白剤や皮なめし剤として使用されるミョウバンが含まれていると推測した」そうですが、根拠も明らかでなく未だに解明されていません。



写真-5 市川（高木橋から下流を望む）

この姫路革の持つ独特の「白さ」は、高木地区を流れる市川の水でなければ出せず、同様の原皮、製法をもってしても千種川の水では革が黒くなってしまい、揖保川の水では革が柔らかくなりすぎて腐敗してしまうこともあるとか。

なお、姫路革がしなやかで強靱な理由は、塩と菜種油を加えて、足で繰り返して揉みこむことによって繊維が絡まり合うから、といわれています。

■ クロムなめしの普及に伴い生活環境が悪化

明治以降、新式製革法として植物タンニンなめしやクロムなめしの技術が普及するにつれ、旧来からの姫路革は生産性が低いこともあって次第に衰退していきました。特に昭和 20（1945）年以降、高木地区ではクロム鞣革製造一色となり、姫路革を製造する業者は激減しました。クロムなめしは、なめし時間が短く、工程管理が容易で、価格も安く、なめし剤の中で最も高い耐熱性が得られ、薄くしてもそれなりの強度がある等の優れた性質を持っているためです。そして、皮革需要の増大に伴い、クロムなめしによる生産量が増え、昭和 30 年代になると皮革工場からの排水が川を汚染し、悪臭を放つなど生活環境の悪化は深刻の度を増していきました。

市川の水質を改善するには、皮革排水を適切に処理する必要があり、この処理は本来原因者においてなされるべきものです。しかし、皮革産業は零細かつ工場敷地が狭隘な企業が多いことから、姫路市は皮革関連排水を公共下水道で受け入れることにしました。受け入れに際して、排水は石灰・油分等の浮遊物を多量に含み、BOD・SS も非常に濃度が高く、この排水を直接管渠に流入させると浮遊物の付着による流水断面の縮小、硫化物による管の腐食、終末処理場での処理に過大な負荷がかかる等の問題があるため、まずこの排水を一次処理するために前処理場を建設する方法がとられました。

高木地区では、市川左岸の高木前処理場が昭和 49（1974）年 3 月に運転を開始し、二次処理施設となる東部終末処理場は昭和 58（1983）年 4 月に完成、直ちに前処理場と接続しています。また、右岸の高木川西前処理場^{※6}は昭和 61（1986）年 2 月に完成し、二次処理施設となる中部終末処理場（昭和 54 年 4 月完成）に接続しています。

市川に流入する皮革排水は、高木川西前処理場が中部終末処理場に接続された時点で、すべて公共下水道によって処理されることになりました。

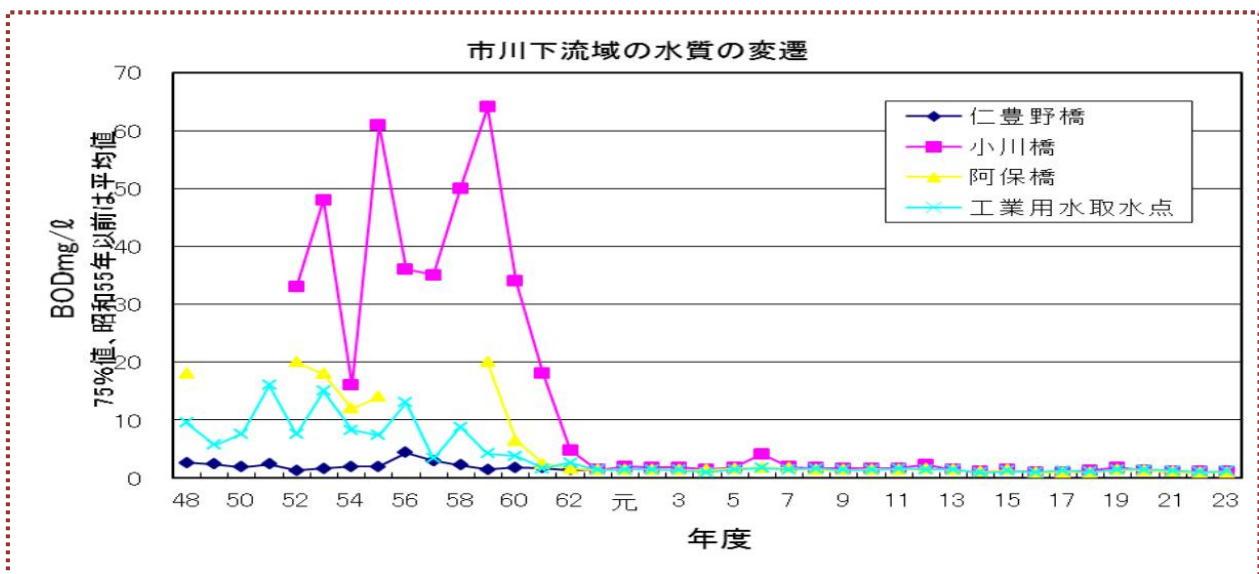
また、下水汚泥は兵庫西流域下水汚泥広域処理場において処理しています。汚泥には皮革のなめし工程で使用される高濃度の三価クロムが含まれていて、通常の焼却処理（800～900℃）では有害な六価クロムに変わることから、スラグ化によりクロムを封じ込める溶融処理（炉内温度1400℃以上）をしています。

ところで、クロムなめしが導入される以前の市川の水質はどうだったのでしょうか。ある皮革事業者の方に聞くと、「そもそも生産量が現在に比べて圧倒的に少なかったことに加え、昔の技法では、原料のほとんどが再利用されていた」ため、それほど汚れていなかったそうです。脱毛した毛はフェルトや毛布の原料、あるいは肥料に使われ、裏漉きの際に出る二ペ（皮の内面を削って得た肉片）は膠（ニカワ）の原料として高く売れたといわれています。

※6 高木川西前処理場：皮革需要の減少に伴い生産量が落ち、排水量が減ったことから高木川西前処理場を廃止し、高木前処理場に統合している。

■ 水質が大幅に改善

下水処理が始まってから市川の水質は右図のようにずいぶんと改善されました。ただ、残念なことにまだ下水道への接続がされていない工場排水もあるようで、現に川漬けしている場所のすぐ近くで茶色の工場排水（皮革排水ではない）が流れ込んでいました。



■ モノローグ

姫路市書写の里・美術工芸館で開催されていた特別展示『姫路皮革物語』（9/8～10/14）でお会いした皮革史研究家の林久良氏が、11月下旬に「川漬け」をされるということで、筆者も見学させていただきました。わずか1時間程度の見学でしたが、多くの文献を読むよりはるかに理解を深めることができました。

氏は研究の一環として伝統的技法の再現に取り組まれていて、何とかこの素晴らしい技法を多くの人に知ってもらい技法の保存に道筋をつけたい、との思いで「姫路革の歴史・文化」を通じてその魅力を発信する活動をされているそうです。

【参考資料】

- 『兵庫県皮革産業の歩み “皮翔” 創立15周年記念誌』 兵庫県皮革産業協同組合連合会 平成8年3月
- 『姫路皮革物語—歴史と文化—』 林 久良 平成24年9月
- 『わが国の伝統的な油なめし～姫路白なめし革～』 日本皮革技術協会 HP
- 『電子じばさん館～兵庫県皮革産業の歩み』 HP
- 『ミョウバン、姫路白なめし革細工』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発刊：平成24（2012）年12月 『ひょうご水百景』 No.19

改訂：令和8（2026）年4月 『ひょうご水百景』 No.19